



Data

監督、脚本、エグゼクティブ・プロ
 デューサー：ニウ・チェンザー
 出演：イーサン・ルアン/レジ
 ナ・ワン/チェン・ジェンビ
 ン/チェン・イーハン

👁️👁️ みどころ

韓国の「従軍」慰安婦問題は最終かつ不可逆的に解決した（はずだ）が、台湾の金門島にあった「軍中樂園」とは一体ナニ？これは、別名「特約茶室」「831部隊」と呼ばれた、軍専属の慰安所のことだ。娯楽票一枚につき20分で、延長もOKだが、そこにはどんな「侍応生」が？また、サービスは？料金は？そんなスケベ親父的興味がダメとは言わないが、それ以上に、大陸からわずか2kmの位置にある小豆島と同じくらいの大きさの金門島の軍事的位置付けを含めて、1969年当時の金門島で生きる男と女の間模様をしっかり学びたい。

今から見れば「そんな陳腐な」と思う面もあるが、それも含めて、これが人間の生きざまなのだ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■まずは、「金門島」についての歴史上のお勉強を！■□■

私は2009年11月6日から9日まで、アモイ（厦門）にある厦門城市職業学院での景観法の講義に行き、同時に厦門観光を堪能したが、アモイ（厦門）から約2km先の海上にあるのが金門島。今でこそ金門島は厦門の観光名所になっているが、中国共産党に敗れた国民党が1949年に台湾に撤退した後、反撃の拠点として軍事要塞化したのがこの金門島だ。台湾からは280kmも離れている小豆島程度の大きさの金門島は大陸から直接砲撃ができる距離にあるため、1958年8月23日から10月にかけて47万発の砲弾が撃ち込まれたそうだ。その後も大陸からの攻撃は奇数日に定期的に行われ、砲撃は1970年代まで続いたが、次第に緊張は和らぎ、最大およそ10万人いた兵士も数千人規

模に減少し、2001年からは金門島と大陸の往来が可能になったようだ。

日本は1951年9月8日のサンフランシスコ講和条約締結後、平和憲法と日米安保条約の下で平和と安全が守られてきたが、金門島にはそんな歴史があるわけだ。その緊張感、本作冒頭の1969年、中国と台湾が対立していた時代、金門島に配属された新兵ルオ・バオタイ（イーサン・ルアン）と、彼らを厳しく指導する教官ラオジャン（チェン・ジェンビン）らの姿を見ればよくわかる。アメリカの海兵隊の訓練の厳しさは『G.I.ジェーン』（97年）等で明らかだが、それは韓国でも、中国（人民解放軍）でも、そして台湾でも、更に旧日本陸軍でも同じ。もっとも、本作では泳ぐことが基本的な素養であるはずの金門島の精鋭部隊に配属されたバオタイが、まさかカナヅチだったとは何ともはや……。こりゃちょっとマンガ的すぎるが、現実には現実だ。

しかして、バオタイは本作のタイトルとされている「軍中樂園」に配置換えされたが、別名「特約茶室」とも「831部隊」とも言われている「軍中樂園」とは一体ナニ？

■□■「軍中樂園」＝「特約茶室」＝「831部隊」とは？■□■

韓国の従軍慰安婦問題は2015年12月28日の日韓外相会談で締結された「慰安婦問題日韓合意」によって、最終かつ不可逆的に解決したはず。ところが、2017年5月9日の大統領選で勝利した「共に民主党」代表の文在寅政権が登場したことによって、すべてが怪しくなっている。しかし、これは国と国との信義上、如何なもの……？そんな論点を突き詰めていけば、朝日新聞 vs 産経新聞の長年に渡る論争をしっかりと検証しなければならなくなるが、そんなクソ難しい議論はさておき、本作のタイトル「軍中樂園」とは一体ナニ？これは1990年前後まで40年間に渡って台湾各地に広がっていた「特約茶室」という娼館のことで、コードネームは「831」、通称「軍中樂園」と呼ばれていたようだ。本作では、台湾にもそんな名称の娼館があって慰安婦が存在していたこと、そして、そこにはニウ・チェンザー監督が描く慰安婦とそこに通う客との間様々人間模様があったことをしっかり確認したい。

本作のパンフレットには、①野嶋剛（ジャーナリスト）の「映画『軍中樂園』における『特約茶室』というテーマを我々はどう考えるべきか」と、②秦早穂子（映画評論家）の「映画で歴史を語りつなぐ “軍中樂園” より」があるので、これは「軍中樂園」＝「特約茶室」＝「831部隊」を考える上で必読！台湾でも「軍中樂園」に対する強い批判があるのは当然だが、もちろん本作はそれを議論するためのものではない。

本作にはニーニー（レジーナ・ワン）とアジャオ（チェン・イーハン）という2人のすごい美人の「侍応生」が登場している。それが、私が本作を鑑賞しようと思った動機の一つだと告白すると批判されそうだが、それはれっきとした事実。そんな不純な動機（？）による観客がもっとたくさんいてもいいはずだが、私が劇場で本作を鑑賞した時の観客が20名程度と少なかったのは残念。歴史の勉強をたっぷりできるこんな映画を、日本人は

もっと鑑賞しなければ・・・。

■□■チェンザー監督はなぜこんなテーマを？その視点は？■□■

台湾映画といえば、ホウ・シャオシェン監督の『悲情城市』(89年)、『シネマ17』350頁)と、エドワード・ヤン監督の『牯嶺街少年殺人事件』(91年)、『シネマ40』58頁)がその代表だが、ニウ・チェンザー監督の『モンガに散る』(10年)も近時の名作。一見、韓国映画に多い学園モノだと錯覚した同作は、1980年代に「生まれた日は違っても、死ぬ日は同じ」という義兄弟の契りを結んだ5人の若者たちの、実録ヤクザ路線並みの本格的な極道間抗争を描いたリアルなものだった(『シネマ25』121頁、『シネマ34』467頁)が、同監督は本作でそれとは全く毛色の違う映画を監督・脚本・プロデュースした。

パンフレットにあるニウ・チェンザー監督のインタビューによれば、その動機は両親とも軍人の家系であった監督自身の出自や、子供時代の体験、さらには自分自身の兵役の経験等にあるらしい。また、直接の動機は「金門島出身の老兵が軍中樂園について書いた文章を読んだこと」だが、彼は本作で「侍応生」と呼ばれた慰安婦の女性たちをどのような視点で描くの？

そこで大切なことは、映画はあくまで娯楽であり、芸術だということ。つまり、政治主張や政治宣伝の場ではないということだ。かつて私が毎週見ていた『そこまで言って委員会』は最近バラエティ色が強くなりすぎているためあまり見なくなったが、本作のようなテーマは政治色が強くなりすぎてもダメだし、逆にバラエティ色(娯楽色)が強すぎてもダメ。ほどほどの芸術性(のアピール)が難しい。本作にはニーニーとアジャオという2人の美女が登場しているので、その面での魅力は十分。さあ、本作で見せるニウ・チェンザー監督の芸術的手腕は・・・？

■□■この女たちの過去と今、そして未来は？■□■

勝新太郎が主演したシリーズ物の代表は『座頭市』シリーズだが、他にも『悪名』シリーズや、『兵隊やくざ』シリーズ等がある。『兵隊やくざ』(65年)には朝鮮人慰安婦が登場し、勝新太郎扮する大宮二等兵や、田村高廣扮する有田上等兵とねんごろになっていたが、彼女たちには暗さはなく、そのたくましが際立っていた。また、日本から東南アジアへ渡った「からゆきさん」を描いた『サンダカン八番娼館 望郷』(74年)でもそれは同じだった。しかして、本作に登場するニーニーとアジャオは美人であるうえ、一見毎日楽しく働いているようだから、何よりもそれに注目！

もっとも、なぜニーニーとアジャオは今「軍中樂園」で侍応生として働いているの？それを突き詰めていくシーンになると、そこでは当然リアルな物語になっていく。また、軍隊勤務の中でいじめられているバオタイの友人が脱走を決意し、1人の侍応生と共に海の中に飛び込んでいくシークエンスを見ると、その悲しさを実感！また、ある意味で、ラオジ

ヤンのような生真面目かつ純朴な中年男の純情を結婚というエサ(?)でもてあそんでいるともいえるアジャオの仕事ぶりを見てみると、そこにも奥深い悲しみが潜んでいることがよくわかる。

『人間の條件』(59~61年)『シネマルーム8』313頁)第5部・第6部では、仲代達矢扮する梶上等兵と共に中村玉緒扮する売春婦たちが共に脱走の旅に出たが、そこには悲しい結末が待っていた。それに対して本作では、殺人罪の刑を軽減してもらうため志願して「侍応生」となり、「軍中樂園」に入ったニーニーが、恩赦によって自由の身になる姿が描かれるから、彼女はハッピー・・・?いやいや、そんな単純なものではないが、本作ではこのニーニーやアジャオを始めとして、「軍中樂園」で働く女たちの過去と今、そしてその未来をしっかりと考えたい。

■□■「男の純情」のあり方もしっかりと!■□■

本作では冒頭、たくましい身体で金門島の精鋭部隊の訓練に挑むバオタイの姿が描かれる。ところが、「童貞であること」と「プラトニックな関係の恋人がいること」が見込まれて(?)「軍中樂園」勤務に配置換えになってからは、何かとバオタイの「男の純情」ぶりが目立ってくる。2階と3階に住み、日常的にニーニーの世話をしているバオタイが、ニーニーに惹かれていることはミエミエ。そして、ニーニーもバオタイが相手ならタダでいいと言っているのだから、バオタイがニーニーに童貞を捧げるのは時間の問題。いつまでも台湾で待つ恋人との約束を守る必要はないはずだ。そんな俗物的思考の下で私はそう考えていたが、いやいや、バオタイの場合は・・・。

他方、精鋭部隊の教官としてバオタイたちをしがいていたラオジャンは大陸出身の貧しい出自で、字も書けないことがわかってくるから、ビックリ。これでは軍人としての出世は望めないのは当然だが、彼がバオタイに語る子供時代の靴を巡る母親との思い出話には胸がかきむしられる。そんな中年男が、小悪魔的な魅力を持つ侍応生のアジャオに惹かれたのはわかるが、それにしても本気で「結婚!」とは何ともはや・・・。ラオジャンは上官からの借金から台湾での餃子店の開店まですべて計画し、結婚式の段取りもすべて準備していたが、さてアジャオは・・・?日本では現在、働き方改革を巡る議論が活発だが、軍による管理売春の色彩が濃厚な「軍中樂園」での勤務実態は、「娯楽票」というチケット1枚につき20分。延長もOKだが利用券の追加が必要、というもの。また、料金等は前述のコラムで勉強してもらいたいが、アジャオに「軍中樂園」の仕事を辞めさせて結婚するというのは、ラオジャンにとって重い重い決断だったはずだ。

本作ではそんなバオタイとラオジャン、2人の男の「男の純情」のあり方をしっかりと確認したいが、さてその結末は・・・?ラオジャンには何とも悲しい結末が待っていたし、遂に童貞喪失か、というシークエンスに見るバオタイの対応も私にはかなり意外。たしかに、これは若い男の純情と言えなくもないが、その賛否は・・・?

■金門島の、そして台湾の今は？未来は？■

昨年10月の中国共産党第19回全国代表大会以降、習近平政権は独裁色を強め、言論統制を進めている。また、国産空母の建造をはじめとする軍事力の拡大を着々と進めているから、南シナ海で「航行の自由」作戦を展開する米国との緊張関係が強まっている。そこで最大の問題になるのが、習近平主席が最大の目標としている「台湾統一」の可否だ。

5月29日付読売新聞は「南シナ海緊張高まる」「中国軍拡が加速」「米警戒 艦艇派遣」の見出しで、その状況を報道した。もちろん、台湾は中国が引いた「第一列島線」の内側（大陸側）にあるから、「いざ、台湾有事！」になれば、大陸と台湾との間の台湾海峡に緊張が走り、金門島は再び台湾の軍事拠点の最前線になることは間違いない。他方、5月30日付朝日新聞は「自由な空気を求め台湾へ」「言論締めつけの香港から」「蔡政権 違ひアピール」の見出しで、台湾の蔡英文政権が、台湾を中華圏における「民主化の先進地」と位置づけ、自由度の高さをアピールしていることを伝えた。これは、事実上共産党の独裁が続く中国との違いを国際社会に示すのが狙いだが、現実には、中国の弾圧を受けた香港の書店などが台湾を拠点に選ぶ動きも出ているようだ。

しかし、大局的・長期的に見ると、将来は日本の沖縄が中国領土に組み込まれる可能性を含めて、台湾が中国に組み込まれてしまう可能性が高いと、私は考えている。そんな視点で考えると、日本における沖縄と同じように、台湾における金門島が地政学的に重要な存在であることは、この映画が描く時代も今も同じだ。しかして、金門島の、そして台湾の、今は？そして未来は・・・？

2018（平成30）年6月1日記